

県立大 編

大学生が企画、取材、原稿執筆に挑む紙面「大学生TIMES」。今回、学生記者を務めたのは県立大経済学部3年の女子学生3人。未開の地で現地民に密着したり、北欧で難解な文学を読み解いたり、世界をまたにかけてユニークな研究を続ける県立大芸術教養センターの先生を直撃し、「ぶっ飛びエピソード」を聞きました。＝「大学生TIMES」は日曜の教育面で掲載します。

大学生TIMES

世界ぶっ飛びエピソード

学生がユニーク先生取材

アイスランド文学読み解く

松本 涼 講師

日本漫画、アニメと接点

アイスランドと日本のゲームに接点。中世アイスランドの歴史・文学を専門とする松本涼講師は近年、日本の漫画やアニメで北欧神話がどのように使われているかを研究している。

研究で中心となる資料は「サガ」と「エッタ」。サガはアイスランドに残されている歴史物語で、ノルウェーやアイスランドで起きた出来事を題材にフィクションも織り交ぜた壮大な作品。日本の「平家物語」のようなものという。エッタは神話や英雄伝説を題材にした書物で、アイスランド版の「古事記」「日本書紀」だ。

サガもエッタも実は日本と意外な縁がある。登場人物が、日本のロールプレイングゲームのキャラクターになっていたり、アニメや漫画になっていたりする。「エルフ」や「ドワーフ」、北欧神話の中で戦争と死をつかさどる最高神のオーディンなどを知っている



歴史資料に目を通す松本講師＝アイスランド



歴史資料「サガ」の写本の一部

人も多いだろう。スマホゲームの「パズドラ」、ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」なども北欧神話がモデルになっているらしい。壮大でドラマチックな世界観が物語のモチーフになりやすいのだろう。「サガには自分が知らないことが多く書いてあり、人々の息づか

いが伝わってくる。アイスランドという国を多くの日本人に知ってほしい」と松本講師。今後は漫画やサブカルチャーに登場する北欧神話を発信したり、サガやエッタを日本語で読めるようにしたりすることが目標という。

【経済学部経済学科3年・矢野愛】

ボルネオ島で民族の「一員」に

加藤 裕美 准教授

サル食べるんです

「サルを食べるんですか！」。加藤裕美准教授＝写真＝の研究室で思わず声を上げてしまった。准教授の専門は文化人類学、東南アジア地域研究。マレーシアのボルネオ島サラワク州のブラガという地



域に何度も足を運んでいる。現地の食生活は日本より豊かだという。狩猟や採集で得た果物やイノシシ、シカのほか、サルも捕獲して食べてしまう。見せてもらったサルの燻製の写真は衝撃的だった。ただ、飼っている鶏はペットとして扱い、食べないそうだ。



ボルネオ島のブラガの子供たち＝マレーシア

人々は平等意識が高い。狩猟の時も、みんなで分けられるように大きい獲物しか捕らぬ。「日本から来た私も社会の一員として分け前がもらえる瞬間がうれしい」と笑顔を見せる。

インフラ設備が整っていないため衛生状態はよくない。感染症にかかることもある。それでも「川で水浴びもするし、川の水も飲みますよ」。見た目はきれいで穏やかな先生だが、かなりたくましい。

ブラガでは約20の民族集団が生活しているが民族ごとに言語は違う。もちろん教材はなく、現地で言語を自力で作成する。3カ月もあれば日常会話は習得できるとか。「日本とは食文化、生活習慣が全く異なる世界だが現地の人の行動や考え方が分かるのはとても楽しい」と熱く語ってくれた。

夢は調査してきたことを本にすること。「日本語や英語、マレー語で著して、現地の子供が自分の地域の歴史について知ることができたら」とほほえんだ。

【経済学部経済学科3年・矢野愛】

アマゾンで現地民に密着

石丸 香苗 准教授

2回デング熱なんの

デング熱にも負けず、ブラジルのアマゾン飛び回る石丸香苗准教授＝写真。

「現地の人には感情が豊かで人の生き方の根本に触れている気がする」と魅力を語る。喜び、苦しみ、悲しみ…。住民から伝わる生命力が研究の原動力だ。

貧困層を対象に、人々の暮らしや森林の利用方法を探っている。病気にかかっても治療が受けられず、亡くなる人もいる。麻薬に走り、お金が払えなくなり、

殺されてしまう若者もいる。それでも生命力の強さを感じるという。「貧困層の割合が大きいこともあり、人々は連帯する。抑圧されたままの存在しているのではなく、自分の状況を変えようとする力強さがアマゾンにはある」

現地へは年に1～2回訪れ、約1カ月間調査する。「現地で一番大変なのは虫刺され」。日本の虫よけ剤はアマゾンの蚊には効かないらしく、虫刺されの薬は現地で調達する。長袖長ズボンの調査着と靴下は必需品。それでも蚊に刺されて

水遊びをするアマゾン地域の子供たち＝ブラジル



デング熱に2回かかったことがあるそうだ。

「ブラジルで貧困層が生まれる仕組みと共通するものではないか。自分の研究を大学の教育に反映するこ

とで、未来を担う若い学生たちがより公平な社会の仕組みをつくってほしい」とメッセージを送ってくれた。

【経済学部経済学科3年・鈴木静華】

未知のアフリカ 長年交流

杉村 和彦 教授

最先端の共生社会

大学で文化人類学などの授業を担当している杉村和彦教授は、アフリカ研究で知られる。研究を始めたのは大学生時代。当時は今以上に速く未知の世界で、長年交流を続け「日本人として教えてもらうことが多くある」という。

開発が進んでいないアフリカでは食べ物を分配する精神が強い。生き抜いていくために分け合う「共食」という文化があり、約10軒の家が一緒に食事を取る。物を分け合えば飢える可能性は低くなり、生きやすいからだ。一人が裕福となるのを嫌い、平等な社会を構成しているそうだ。こ

した人と人とのつながりは日本の社会に示唆を与えるものかもしれないと感じた。

アフリカではかつて近代的な農業を導入しようという動きはあったが、一部地域は拒否し続けている。「分配の精神」故に、市場化には向かない。「アフリカで

【経済学部経済学科3年・田中瑠華】



タンザニアの住民たちと写真に収まる杉村教授(後列の左端)

取材を終えて

恐れぬ姿勢 すごい

世界について、実際に試してみないと分からないこ

とや気が付かないことを聞けて良かった。デング熱など日本に住んでいたなら想像もつかないような病気が当たり前にある世界へ恐れずに行くことはすごいと感じた。(田中)

研究楽しむ点 共通

先生方の研究内容は全く違うが、研究を楽しんでいる点は共通している。世界の歴史や文化、課題など多くのことを知ることがで

き、視野が広がった。記事を読んで少しでも多くの人に興味を持ってもらいたい。(鈴木)

たくましさ 驚き

どんな環境にあっても研

究を楽しんでいる先生方のたくましさは驚いた。生活や習慣が違っても、適応し、社会の一員として生活できるからこそ、その地域に住む人々の立場に立って考えることができるのだろう。(矢野)

この紙面は私たちが企画、取材、執筆しました。経済学部経済学科3年 矢野愛、鈴木静華、田中瑠華

次回の1月は福井工大編です。